

# 兩生類



## 概要

福岡県産両生類の希少種選定にあたり、爬虫類・両生類分科会では全種を対象に県内の分布情報を収集し、記録地点の3次メッシュ数（環境庁、1997）に基づいて分布図を作成した。分布情報は分科会委員、調査協力者によって直接現地で得られた情報のほか、各種雑誌に掲載された論文・報文、市町村が作成した自然環境調査報告書、土木工事に関わる環境影響評価書、国土交通省の水辺の国勢調査等に含まれるデータも収録した。これにより、分布域に関しては数量的比較が可能となった。福岡県RDB2001作成の際にも同じ手法をとっており、今回の希少種選定には前回に得たデータも含めて評価を行った。なお、現地調査は成体、幼体、幼生、卵塊、鳴き声に基づいて行い、種の同定には高田・大谷（2011）、内山ほか（2002）、大谷（2009）、蒲原・前田（1994）、前田・松井（1999）、松井・関（2008）を参考にした。

一方、個体数の増減を示す数値的データを得るのは困難であり、これは野外で観察できる個体数、産卵数の年次変動が大きく、年毎の気象条件に大きく影響されることに起因する。両生類が活動する時期は種ごとに異なるから、このような調査を広い範囲にわたって行うのは事実上不可能であり、今後は調査対象種と調査域を絞って継続的な調査を行う必要がある。今回は分科会委員の経験に基づく増減の印象、および生息場所の環境変化を勘案して増加、減少の傾向を判断した。

福岡県に分布する両生類は、有尾目（サンショウウオ目）5種、無尾目（カエル目）11種の合計16種である（福岡県両生類目録）。日本には有尾目26種（固有種25）、無尾目41種（固有種29、外来種3）が分布しており、福岡県には日本産有尾目の19.2%、無尾目の26.8%が分布していることになるが、琉球列島の種を除外すればこれらの値はそれぞれ20.8%、52.4%となる。このうち、ウシガエルは北アメリカ原産で、「外来生物法」で特定外来生物に指定されている。種の分類と和名については日本爬虫両棲類学会（2013）、学名はFrost（2013）に従った。今回、福岡県の両生類相にコガタブチサンショウウオが新たに加わった。この種は小山（1947）によってブチサンショウウオの亜種として記載されたものであるが、形態やミトコンドリアDNAの比較などからブチサンショウウオとは異なることが判明し、亜種ではなく、別の種であるとされた（Tominaga and Matsui, 2008）。

今回希少種として選定した両生類は絶滅危惧IA類1種、絶滅危惧IB類1種、絶滅危惧II類5種、準絶滅危惧4種の合計11種で、前回に比べ絶滅危惧II類が1種、準絶滅危惧が3種増加している（新旧対照表）。この数は福岡県産両生類の約70%に相当し、絶滅危惧種のみに限っても44%にあたる。実際には指定外のニホンアマガエルやウシガエルなども以前に比べて明らかに減少しているという情報が寄せられていて、後述のハビタットの変化を考えれば両生類全体が減少しつつあることは否めない。

今回カテゴリーを変更した種は、いずれも前回ランク外としていた種であるが、その指定理由は次の通りである。コガタブチサンショウウオは産地が極めて限定されており、生息環境も開発に伴って徐々に悪化しつつあることを考慮して、絶滅危惧II類に指定した。ブチサンショウウオは県内の山地に比較的広く分布するが、生息環境は前種と同様の状況にあること、および環境省第4次レッドリスト（2012）で準絶滅危惧に指定されていることを勘案して、準絶滅危惧とした。ツチガエルとカジガエルは局地的に多くみられる場所があるが、県内全域で見ると減少傾向にあり、衰退をもたらした水田域や渓流域の環境変化は今後も続くと予想されるため、準絶滅危惧に指定した。

もっとも絶滅の危険性の高い絶滅危惧IA類のオオサンショウウオは、福岡県で過去に15の捕獲例が知られているが、その多くは飼育個体が逃げ出したとみなされるもので、確実な産地は赤村の十津川（今川の支流）のみである（倉本、2002）。十津川での捕獲は4例あるが、1990年以後の捕獲例はない。2012年3月に分科会委員2名を含む4名で十津川の上流、通称“はじかみ淵”で幼生の生息を確認するための予備的調査を行ったが、採集することはできなかった。現地はほとんど人の立ち入る場所ではなく、生息し

ているとしても人目に触れる機会は極めて少ないと考えられる。今後の詳細な調査をまたねばならないが、現状では絶滅と判断することはできないとして絶滅危惧IA類に指定している。

## ハビタットとその変化

両生類の多くは成体の生息場所と産卵場所が異なっている。近年、両生類の生息する環境、特に産卵場所の環境が大きく変化し、希少種のみならず両生類全体に多大の影響を及ぼしている。

### (1) 水田域

水田は人工的につくられた湿地とみなすべきもので、多くのカエル類にとってもっとも適した産卵場所である。水は浅くて日当たりがよいため水温が上昇しやすく、餌となる藻類や小動物も多く、捕食者は少ない。周辺の畦、水路、農道には草本類が多く、成体の隠れ場や昆虫類などの餌動物も豊富であった。ところが、最近では田植え時でも水田の水は非常に浅く、田植え後はしばしば中干しが行われるようになった。通常、水深10 cm程度の浅い水にはニホンアマガエル・ヌマガエル・ツチガエルのように小型で卵を分散して産むカエルは産卵するが、トノサマガエルのように大型の卵塊を産むカエルは産卵しない。また、中干しによってしばしば卵塊や幼生が干上がって死亡している例が目撃されている。このことは普通種であるニホンアマガエルやヌマガエルにも今後大きな影響を与えるものと予想される。灌漑水路も田植えの時期を除くと水量が減少し、収穫時期以後はまったく水のないことが多い。ツチガエルのように幼生で越冬するカエルはこのような環境では生存できない。水田の給水、排水が暗渠となっている場所では、水路そのものがなくなっている。畦がコンクリート製となってまったく草地がない水田も多いが、このような環境では水辺を好むカエル類の生息は不可能といっていよい。

山間部の水田域には水の途切れない水路や湿田が多く、このような場所にはアカハライモリやトノサマガエル・ツチガエルが多くみられる。これらの種は、平地では比較的広くて常時水のある水路にみられる。なお、冬から早春にかけて産卵するニホンアカガエル・ヤマアカガエルは山際の溝や湿地、小さな池などに産卵するが、冬期の水田には通常水が無く、トラクターの轍跡などに溜まった一時的な水溜りに産卵する例が多い。後者の場合、降雨が少ないと卵塊や幼生は干上がって死亡する。ニホンアカガエル・ヤマアカガエルの成体は、産卵期以外は周囲の山林内で生活する。なお、山間部の放棄水田は乾田化して、産卵場所として役立たなくなっている。

カスミサンショウウオは水田に産卵する種とはいえないが、湿田に産卵することがある。典型的には丘陵地の森林や竹林と水田・畑地の間の溝に産卵し、このような場所は排水がよくなって乾燥化したり造成によって宅地になるなどして、年々減少している。また、近年イノシシによる被害を防ぐためトタン板で囲った水田、畑地が散見されるようになり、両生類の移動の妨げになっているほか、両生類が産卵する水溜りがぬた場となっている箇所もある。イノシシは両生類を捕食することが知られており、その影響も懸念される。

### (2) ため池、クリーク

普通種のウシガエルはこのハビタットで生活し、産卵する。最近ウシガエルの数も大きく減少しているが、その原因は明らかでない。ブラックバスなどの外来の肉食魚やミシシippアカミミガメが増加していることと関連して、例えば幼生がブラックバスに捕食されている可能性があるが、確証はない。ニホンヒキガエルは山林内で生活するが、ため池の浅い場所に集まって産卵することが多く、大量の幼生を見ることも多い。ヒキガエル類は有毒であるから、捕食を免れている可能性がある。アカガエル類はしばしば山間部のため池に産卵することがある。おそらくこれは産卵場所が少なくなったことに伴う非常事態であろうが、現状では貴重な安定した産卵場所であることは疑いない。

### (3) 山地

コガタブチサンショウウオ・ブチサンショウウオ・普通種のタゴガエルは山林内で生活し、産卵期に湧水域に移動する。カジガガエルも山林（樹上）で生活するが、産卵は大きな石の多い流水で行われる。このような産卵場所はダムや砂防ダムの建設により、年々失われてきた。ダムの設置される場所はカジ

カガエルの産卵に最適の場所が多く、これまで多くの産卵場所が消失してきたが、今後も同じことが続くであろう。古い砂防ダムには多量の土砂が堆積し、結果的に周辺の湧水場所を埋めている。

## 保全対策

陸水域は現在もっとも危機的状況にある生物の生息環境の一つであり、両生類のほか、淡水魚類・水生昆虫などの衰退の大きな原因となっている。日本はウエットランドと呼ばれ、ことに水田域の大小の水路網は多様な動植物を育ててきた。ところが、前述のように稲の生育期にも水田の水量が少なくなり、中干しが多くなった傾向があるが、少なくとも年間を通じて水路に十分な水が供給されれば、水田域の両生類を含む多様な生物相が大幅に回復することが期待できる。また、放棄水田を湿地として一種の淡水ビオトープとして活用したり、山際の水田に冬期湛水を試みることにより、アカガエル類やサンショウウオ類など、冬期産卵の種に好適な産卵場所を提供することが可能となる。

県下には林や草地に接して浅い池のある公園・緑地・ビオトープなどがいくつかあり、その多くは両生類の産卵場所として利用されている。九大伊都キャンパスの生物多様性保全ゾーン、最近造成された北九州市若松区の響灘ビオトープ、福津市の手光ビオトープ(中島ほか, 2012)などはその好例である。県立公園などに湿地環境を造成することは、水生生物の保全のみならず、理科教育や環境教育の場としても活用できる。

最近の開発に伴う土木工事は、自然環境や生態系に配慮することになっている。ダム建設では山間部の水田域、渓流域が消失することになるから、そこに生息する両生類は生息場所や産卵場所を失い、やがて消滅するほかない。環境変化の影響を緩和する、いわゆるミチゲーションの手段として、少なくともその周辺に代替環境を整備する必要があるが、その方法は動物群ごとに多少とも異なるから慎重な検討が必要である。

## 調査協力者名 (50音順)

井上大輔, 井上哲也, 岩崎朝生, 岩橋 正, 鶴川 亮, 江頭修志, 大川博志, 大牟田生物愛好会, 勝野史雄, 河野 誠, 川原二郎, 菅野一輝, 北九州市立自然史・歴史博物館自然史友の会両生・爬虫類部会, 近藤卓也, 阪田和弘, 佐藤真一, 多比良 修, 築島基樹, 富永 篤, 中島 淳, 永田新悟, 中野紘一, 中村晋也, 西川完途, 旗生公典, 廣田知良, 宝理信也, 三谷敏彦, 宮形佳孝

## 引用文献

- 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関 慎太郎. 2002. 日本の両生爬虫類. 平凡社, 東京.
- 大谷 勉. 2009. 日本の爬虫両生類157. 文一総合出版, 東京.
- 小山準二. 1947. *Hynobius nebulosus yatsui*. 動物学雑誌, 57: 106-107.
- 環境庁. 1997. 都道府県別メッシュマップ40福岡県. 環境庁, 東京.
- 蒲原鶴彦・前田憲男. 1994. 蛙の合唱(山溪CDブック6). 山と溪谷社, 東京.
- 倉本 満. 2002. 福岡県の両生類相研究史. 両生類誌, 8: 1-11.
- 高田榮一・大谷 勉. 2011. 原色爬虫類・両生類検索図鑑. 北隆館, 東京.
- Tominaga, A. and M. Matsui. 2008. Taxonomic status of a salamander species allied to *Hynobius naevius* and a reevaluation of *Hynobius naevius yatsui* Oyama, 1947 (Amphibia, Caudata). Zoological Science, 24: 752-766.
- 中島 淳・中村晋也・大平 裕. 2012. 福岡県福津市に造成されたビオトープにおけるカスミサンショウウオの産卵事例. 九州両生爬虫類研究会誌, 3: 46-48.
- 日本爬虫両棲類学会. 2013. 日本産爬虫両生類標準和名. 日本爬虫両棲類学会, 京都.  
(<http://zoo.zool.kyoto-u.ac.jp/herp/wamei.html>)
- Frost, D. R. 2013. Amphibian Species of the World: an Online Reference. Version 6.0 (2013年12月アクセス). American Museum of Natural History, New York. (<http://research.amnh.org/herpetology/amphibia/index.html>)

前田憲男・松井正文. 1999. 日本カエル図鑑. 文一総合出版, 東京.

松井正文・関 慎太郎. 2008. カエル・サンショウウオ・イモリのオタマジャクシハンドブック. 文一総合出版, 東京.

### 福岡県両生類目録

目名	科名	種名
有尾目	サンショウウオ科	カスミサンショウウオ <i>Hynobius nebulosus</i> (Temminck and Schlegel, 1838)
		ブチサンショウウオ <i>Hynobius naevius</i> (Temminck and Schlegel, 1838)
		コガタブチサンショウウオ <i>Hynobius yatsui</i> Oyama, 1947
	オオサンショウウオ科	オオサンショウウオ <i>Andrias japonicus</i> (Temminck, 1836)
	イモリ科	アカハライモリ <i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie, 1826)
無尾目	ヒキガエル科	ニホンヒキガエル <i>Bufo japonicus japonicus</i> Temminck and Schlegel, 1838
	アマガエル科	ニホンアマガエル <i>Hyla japonica</i> Günther, 1859
	アカガエル科	ニホンアカガエル <i>Rana japonica</i> Boulenger, 1879
		ヤマアカガエル <i>Rana ornativentris</i> Werner, 1903
		タゴガエル <i>Rana tagoi tagoi</i> Okada, 1928
		トノサマガエル <i>Pelophylax nigromaculatus</i> (Hallowell, 1861)
		ツチガエル <i>Glandirana rugosa</i> (Temminck and Schlegel, 1838)
		ウシガエル <i>Lithobates catesbeianus</i> (Shaw, 1802)
	ヌマガエル科	ヌマガエル <i>Fejervarya kawamurai</i> Djong et al., 2011
	アオガエル科	シュレーゲルアオガエル <i>Rhacophorus schlegelii</i> (Günther, 1859)
カジカガエル <i>Buergeria buergeri</i> (Temminck and Schlegel, 1838)		

### 新旧対照表

	福岡県RDB2001のカテゴリー				再選定 種数※	追加 種数※	掲載 種数※
	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧			
今回の カテゴリー	絶滅危惧IA類	オオサンショウウオ			1		1
	絶滅危惧IB類		トノサマガエル		1		1
	絶滅危惧II類			カスミサンショウウオ ニホンヒキガエル ニホンアカガエル ヤマアカガエル	4	1	5
	準絶滅危惧				1	3	4
					7	4	11

	福岡県RDB2001のカテゴリー				合計 種数
	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	
今回除外した種※					0

		今回追加した種
今回の カテゴリー	絶滅危惧II類	コガタブチサンショウウオ
	準絶滅危惧	ブチサンショウウオ ツチガエル カジカガエル

- ※ 再選定種数 … 福岡県RDB2001の選定種のうち、今回（福岡県RDB2014）でも再び選定した種の数。  
 追加種数 … 福岡県RDB2001の選定種以外で、今回（福岡県RDB2014）において新たに選定した種の数。  
 掲載種数 … 福岡県RDB2014に選定した種の数。（「再選定種数」と「追加種数」の合計）  
 今回除外した種 … 福岡県RDB2001の選定種のうち、再評価の結果、今回（福岡県RDB2014）は選定しなかった種。

有尾目オオサンショウウオ科		オオサンショウウオ	絶滅危惧 IA 類
<i>Andrias japonicus</i> (Temminck, 1836)		2001：絶滅危惧 IA 類，環境省：絶滅危惧 II 類	
選定理由	県内での確実な産地は赤村の十津川のみであるが、1990 年以後の捕獲例はなく、現在の生息状況は不明である。2012 年 3 月に十津川の上流で幼生の生息についての予備的調査を行ったが、確認には至らなかった。本種は 60 年以上という長い寿命をもつこと、幼生は非常に見つかりにくいということを考えると現状では絶滅と判断することはできないとして、絶滅危惧 IA 類とした。		
危機要因	ダム建設，河川開発，産地局限		
分布情報	今川の支流である赤村の十津川		
種の概要	最大で全長 150 cm にもなる世界最大の両生類である。夜行性が強く、昼間は巣穴や岩の下に潜んでいる。産卵は 8 月下旬～9 月に河川の横穴の繁殖巣穴で行われ、孵化した幼生は翌年の春に巣穴から河川内に分散していく。水生昆虫を食べて成長し、大きくなると口に入るサイズの動物なら何でも食べるようになる。冬季は活動が鈍るものの冬眠はしない。日本固有種。		
特記事項	特別天然記念物		

無尾目アカガエル科		トノサマガエル	絶滅危惧 IB 類
<i>Pelophylax nigromaculatus</i> (Hallowell, 1861)		2001：絶滅危惧 IB 類，環境省：準絶滅危惧	
選定理由	代表的な水田域のカエルであったが、平野部では山沿いの地域を除きほとんどみられなくなった。水路や溝の水、草地などの減少により成体の隠れ場所や餌動物が減少して生息に適しなくなっており、幼生が生息する水域も乾燥の危険性が高く、いずれの場所でも減少傾向にある。山間部の水田域には比較的広く分布しているが、水田環境の変化は今後山間部にも及ぶ可能性が高い。		
危機要因	湿地開発，水路改修，その他（農法の変化）		
分布情報	北九州市，福岡市，大牟田市，飯塚市，田川市，八女市，筑後市，筑紫野市，古賀市，うきは市，宮若市，嘉麻市，朝倉市，みやま市，糸島市，那珂川町，久山町，桂川町，筑前町，東峰村，広川町，香春町，添田町，川崎町，赤村，みやこ町，上毛町，築上町などの山間部。		
種の概要	体長 5～9 cm のカエルで、水辺を離れることはない。5～6 月に水田やその周辺の溝や湿地に大型の卵塊を産む。幼生は 7，8 月に変態し、昆虫などの小動物を捕食する。国外では朝鮮半島，中国大陸，ロシア沿海州に分布。		

有尾目サンショウウオ科		カスミサンショウウオ	絶滅危惧 II 類
<i>Hynobius nebulosus</i> (Temminck and Schlegel, 1838)		2001：絶滅危惧 II 類，環境省：絶滅危惧 II 類	
選定理由	主に丘陵地の森林・竹林近くの湿地・水田・溝などで産卵が行われ、1995 年以前は丘陵地を中心に広く確認されていた。しかし、圃場整備により排水がよくなって産卵場が乾燥化したり、開発によって産卵場所そのものが消失したりして、現在では産卵が確認できない場所が増えている。特に内陸部よりの地域で激減しており、絶滅が危惧される。		
危機要因	湿地開発，土地造成，道路工事		
分布情報	北九州市，福岡市，大牟田市，久留米市，直方市，中間市，宗像市，古賀市，福津市，宮若市，嘉麻市，糸島市，新宮町，岡垣町，川崎町，大任町		
種の概要	最大全長 13 cm ほどで、黄褐色～暗褐色の体色に多くの個体で尾の上部に黄色の条線がみられる。繁殖期は 1～4 月頃で、1 対の卵のうを水底の落枝や小石等に産みつける。環境が変わらなければ毎年同じ場所で産卵が行われる。幼生は 4 ヶ月ほどで変態し、上陸後は周辺の雑木林や竹林に分散し土壌動物を食べて生活する。日本固有種。		

有尾目サンショウウオ科	コガタブチサンショウウオ	絶滅危惧Ⅱ類
<i>Hynobius yatsui</i> Oyama, 1947		2001：－，環境省：準絶滅危惧
選定理由	山地部の溪流周辺の森林で生活し、源流域の地下の伏流水中に産卵する。もともと県内での分布域は非常に限られていたが、砂防ダム建設や林道工事によって沢周辺の環境が改変されて生息場所や産卵場所が減少したり、森林伐採による保水力低下によって伏流水の水位が下がり産卵に適する環境が減少しており、絶滅が危惧される。	
危機要因	産地局限，森林伐採，ダム建設，道路工事	
分布情報	北九州市，直方市，八女市，朝倉市，赤村，福智町	
種の概要	最大全長 13 cm ほどで、茶褐色の地に銀白色の地衣状斑紋が全身にみられる。ブチサンショウウオに似るが尾や鋤骨歯列の形状などで区別できる。繁殖期は 4～6 月頃で、伏流水中の岩や石に 1 対の卵のうを産みつける。幼生期間は 3 ヶ月ほどで、変態して上陸後はワラジムシ目やヨコエビ目等の土壌動物を食べて生活する。日本固有種。	
特記事項	ブチサンショウウオの亜種として扱われていたが、2008 年に独立種として認められた。	

無尾目ヒキガエル科	ニホンヒキガエル	絶滅危惧Ⅱ類
<i>Bufo japonicus japonicus</i> Temminck and Schlegel, 1838		2001：絶滅危惧Ⅱ類，環境省：－
選定理由	産卵場所や餌動物の減少により、平地ではほとんどみられなくなった。県内の山林に広く分布するが、個体数は減少傾向にある。山間部でも産卵に適した比較的浅い水域が減少し、ため池で幼生が発育する例が増加しつつある。	
危機要因	湿地開発	
分布情報	北九州市，福岡市，大牟田市，久留米市，直方市，飯塚市，田川市，八女市，筑紫野市，春日市，大野城市，宗像市，太宰府市，福津市，宮若市，嘉麻市，朝倉市，みやま市，糸島市，那珂川町，篠栗町，新宮町，久山町，鞍手町，筑前町，東峰村，広川町，香春町，添田町，赤村，福智町，苅田町，みやこ町，上毛町，築上町	
種の概要	地上生活をする大型種で、体長は 10 cm を越す。通常、体表は乾いており、多数の小隆起が散在する。鼓膜の上に分泌腺の集中した耳腺をもつ。体色は黒味がかかったものから赤褐色まで変異が多い。春に水中に長い紐状の卵塊を産む。日本固有種。	

無尾目アカガエル科	ニホンアカガエル	絶滅危惧Ⅱ類
<i>Rana japonica</i> Boulenger, 1879		2001：絶滅危惧Ⅱ類，環境省：－
選定理由	通常、標高の低い山地、丘陵地が耕地と接する場所に産卵するが、主として産卵場所の悪化、消失により、個体数は減少している。最近では轍跡などの一時的な水溜りに産卵する例が多く、その場所は年ごとに変動し、極めて不安定である。また、一時的な水溜りでは乾燥死する卵塊や幼生がしばしばみられる。安定した産卵場所の多くは、人為的に造成されたビオトープや公園の池である。	
危機要因	湿地開発，水路改修	
分布情報	北九州市，福岡市，大牟田市，直方市，飯塚市，行橋市，宗像市，古賀市，福津市，宮若市，糸島市，那珂川町，苅田町，みやこ町など。県東部にはヤマアカガエルと共存している場所がある。	
種の概要	赤褐色のスマートなカエルで、体長 6 cm 前後。森林内で生活し、早春に林縁部の溝や湿地に産卵する。卵塊は大型で、幼生は 5、6 月に変態して上陸する。日本固有種。	

無尾目アカガエル科		ヤマアカガエル	絶滅危惧Ⅱ類
<i>Rana ornativentris</i> Werner, 1903		2001：絶滅危惧Ⅱ類，環境省：－	
選定理由	ニホンアカガエルより標高の高い地域に生息するが、ニホンアカガエルと同様、主として産卵場所の変化により個体数の減少傾向がみられる。生息が確認された地点の数は、ニホンアカガエルより少ない。一時的な水溜りに産卵する例が多く、卵塊や幼生が乾燥死する例が観察されている。		
危機要因	湿地開発，水路改修		
分布情報	北九州市，福岡市，久留米市，八女市，太宰府市，古賀市，うきは市，嘉麻市，朝倉市，糸島市，那珂川町，宇美町，筑前町，東峰村，広川町，添田町，赤村，苅田町，みやこ町，上毛町，築上町。北九州市，みやこ町などでは低地にもみられ，ニホンアカガエルと同じ水塊に産卵する例が多い。		
種の概要	ニホンアカガエルに似るが，顎の下に顕著な黒斑をもつこと，背側隆起の前縁が開いていることなどで区別できる。森林内で生活し，冬から早春にかけて溝や湿地に大型の卵塊を産む。日本固有種。		

有尾目サンショウウオ科		ブチサンショウウオ	準絶滅危惧
<i>Hynobius naevius</i> (Temminck and Schlegel, 1838)		2001：－，環境省：準絶滅危惧	
選定理由	山地部の溪流周辺の森林で生活し，源流域の岩石の裏に産卵する。コガタブチサンショウウオより分布域は広いが，コガタブチサンショウウオと同様に砂防ダム建設，林道工事，森林伐採などの開発行為によって生息場所や産卵場所が減少している。		
分布情報	北九州市，福岡市，直方市，飯塚市，八女市，豊前市，筑紫野市，宗像市，古賀市，福津市，宮若市，朝倉市，糸島市，那珂川町，篠栗町，添田町，赤村，福智町，苅田町，みやこ町。日本固有種。		

有尾目イモリ科		アカハライモリ	準絶滅危惧
<i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie, 1826)		2001：準絶滅危惧，環境省：準絶滅危惧	
選定理由	山間部の水田域では本種が多く観察されるが，平地では山際の水田域でも確認できない場所が出てきている。本種の成体は年間を通して水中で生活するが，整備された水田では中干しの間は水路も完全に排水されるところが多く，また，放棄された水田は数年後には陸化することから，生息できる水域は年々減少している。		
分布情報	北九州市，福岡市，八女市，うきは市，嘉麻市，朝倉市，那珂川町，東峰村，みやこ町など。山間部では多くみられる。日本固有種。		

無尾目アカガエル科		ツチガエル	準絶滅危惧
<i>Glandirana rugosa</i> (Temminck and Schlegel, 1838)		2001：－，環境省：－	
選定理由	水田域のカエルであるが，主に水路の改修により生息が困難になっている。本種は幼生で越冬するため，冬期に水路が枯渇する地域で大きく減少しつつある。		
分布情報	北九州市，福岡市，大牟田市，八女市，豊前市，古賀市，うきは市，朝倉市，上毛町など。県西部には比較的多くみられるが，他の地域では散発的に見出されるにすぎない。朝鮮半島，中国大陸，ロシア沿海州にも分布。		

無尾目アオガエル科		カジカガエル	準絶滅危惧
<i>Buergeria buergeri</i> (Temminck and Schlegel, 1838)		2001：－，環境省：－	
選定理由	主としてダムの建設や河川改修により産卵場所となる山地流域が縮小または消失し，全体的に産卵環境が悪化している。		
分布情報	北九州市，福岡市，八女市，豊前市，うきは市，宮若市，朝倉市，那珂川町，東峰村，添田町，みやこ町，築上町など。県西部の河川に比較的多い。日本固有種。		